

論文の和文要旨

論文題目	Institutions, Electoral Politics, and Dynamics of Political Participation in Egypt (1952 – 2005) エジプトにおける制度、選挙政治と政治参加の力学 (1952-2005)
氏名	DARWISHEH Housam ダルウィッシュュ ホサム

エジプトにおける体制の変化や長期にわたって維持される体制を理解するために、これまで権威主義体制／独裁体制や民主化についての議論は数多くされ、研究も蓄積されてきた。しかし、エジプトにおける体制の変化や長期化を分析する際、一党支配体制下での選挙参加の形態に着目する研究はまだ少数である。

本論文は、近現代エジプトにおける選挙政治、政治参加、そしてそれらの相互作用と政党への影響を詳細に検討する。本研究では、1952年以前の立憲君主制期、ナセル (Jamāl Abd al-Nāṣir) 大統領のもとでの一党支配体制期、そしてサーダート (Anwar al-Sādāt) 大統領時代とムバーラク (Husnī Mubārak) 大統領時代での統制された複数政党制期といった近現代エジプトが経験した複数の時期や体制において、政党政治を形成した法律、政治そして選挙という決定要因に着目する。また、本論文では、1984年以降のエジプト議会選挙に注目し、様々な選挙制度のもとでの選挙政治と選挙参加を形作った要因を解明する。

第一章では、初めに、アラブ世界とエジプトにおける権威主義と民主化についての既存の議論を概観する。ここでは、権威主義体制が持続する要因を議論する広範な先行研究を取り上げ、さらに同地域における民主化の展望についての議論も紹介する。次に、一党支配体制のもとでの選挙に焦点を移し、既存の研究における一党支配体制下の選挙の役割に関する議論を整理する。これらの議論は、選挙が権威主義体制を強化すると論じているか、または弱体化させると分析しているかによって、二つに分類することができる。また、本章では、多くの先行研究が、公式・非公式な制度が選挙過程に及ぼす影響に焦点を当てていることを指摘し、それらの研究を検討する。

第二章では、中東地域とエジプトにおける政党の出現と体制の成立を概観する。本章では、まず、政党政治の出現の背景にある諸要因と、政治参加の拡大における政党の役割を議論する主要な先行研究を概説する。そして、立憲君主制期のエジプトの政治制度の特徴を明らかにすることで、1952年の7月革命後に立憲君主制が一党支配体制に移行した理由と、その移行がいかんにして起こったのかを詳細に描き出す。続いて、ナセル大統領時代における重要な政治的・社会的側面、一党支配体制の確立、そしてこの一党支配体制の確立が政治制度の構築と複数政党制の発展に及ぼす影響を考察し、複数政党制の再導入に至るまでの一連の出来事と状況を明らかにする。これらの分析をもとに、サーダート体制とムバーラク体制下のエジプトにおける複数政党制への転換を詳細に考察し、体制と反対勢力の関係がいかんに変化したかを検証する。

続く第三章では、ムバーラク体制における1984年および1987年の議会選挙に焦点を当て、選挙制度と政党の相互作用を明らかにする。ここでは、特にムスリム同胞団（以下、「同胞団」）の選挙参加の政治力学に焦点を当て、選挙制度と政党の関係に着目することによって、選挙制度と様々な選挙に関する規則が政党に及ぼす影響を説明する。本研究において、同胞団が選挙で果たす役割に着目する理由は、第一に、同胞団がエジプト政治において最も高い支持率を誇る社会・政治勢力であることと、第二に、選挙政治において与党の国民民主党（以下「NDP」）に次ぐ強い影響力を持つ反対勢力であるからである。そして同胞団に着目する第三の理由としては、同胞団の選挙参加が、政党政治に大きく影響したことが挙げられる。

さらに本章では、1984年以降のムバーラク体制における三つの選挙制度とその変遷について、これまで検証されて来なかった側面を明らかにする。ここでは、それぞれの選挙制度が導入され、実施された際の法律、憲法そして政治の枠組みを詳細に検討する。この検討によって、これらの選挙制度の変遷が、エジプトにおける複数政党制をどのように形作って行ったのかを説明する。また、選挙制度がいかんに対勢力の選挙戦略と、野党と同胞団の選挙協力に影響し、反対勢力の指導者たちが選挙参加の規制を克服するために、いかん同胞団に接触し、働きかけたのかを考察する。さらに、野党と同胞団の選挙協力が、どのように政党政治に影響を及ぼしたのかについても緻密に検証する。

同胞団の政治参加は、同胞団自身にも変化をもたらすことになった。本章では、最後に、同胞団の選挙参加が、同胞団のイデオロギーの変容にどのように影響したのかを示し、合法的な野党勢力と野党勢力の内部の一体性に及ぼした影響についても検証する。

第四章では、政治参加が規制された「政治の非自由化 (political de-liberalization)」と呼ばれる社会的、経済的そして政治的環境を考察する。ここではまず、なぜ政治参加が規制されることになったのかを、1990年の湾岸危機、1992年の地震、経済危機の悪化、市民社会における同胞団の役割の拡大、過激派の運動等の要因から分析し、説明する。そして、この

政治参加の規制が、選挙における競争を激減させ、特に同胞団の選挙参加が厳しく統制されたことを説明する。

一方、選挙参加の規制によって、同胞団が議会選挙において選挙戦を展開できなかったことは、同胞団にとって弁護士協会などの職種別シンジケートとの関わりを深める機会につながった。同胞団はこの機に様々な職種別シンジケートでの存在感を高め、関係を強化した。ここでは、シンジケートとの関係強化が、2000年および2005年の議会選挙において、同胞団にとって重要な動員の源となったことを検証する。続いて、1980年代の政党リストにもとづく比例代表制から1990年の選挙後に比較多数得票主義にもとづく大選挙区制へと変化した選挙制度が、同胞団にとっては選挙での役割を強化することにつながったが、野党勢力と与党NDPにとっては、その選挙戦略に悪影響を及ぼすものであったことを説明する。

第五章では、2000年および2005年の選挙過程を検証することに焦点を移し、新しい政治と憲法の枠組みが、同胞団、野党勢力、そして与党NDPの選挙参加に与えた影響を検証する。

2000年の議会選挙は、初めて裁判所の判事の監視が導入された選挙であった。ここでは第一に、判事の監視が選挙で果たした役割と、判事の監視が候補者登録や票の集計等の選挙過程に及ぼした影響を考察する。第二に、政党リストにもとづく比例代表制から、比較多数得票主義の大選挙区制へと変化した選挙制度が、無所属候補者と、特に実業家の候補者のさらなる増加にどのようにつながったのかを検証する。これらの新しい環境は、選挙過程と、同胞団と与党NDP双方に影響を及ぼすこととなった。例えば、2000年の選挙で多くの候補者が落選した与党NDPは、党の組織構造を強化する取り組みに着手し、ムバーラク大統領の息子であるジャマル（Jamāl Mubārak）の大統領職の継承に向けた準備を推進することとなった。

2005年の議会選挙は、ムバーラク体制期において、反対勢力の伸張を決定づける最も重要な選挙となった。この選挙を分析するために、単独の大統領候補を国民投票で承認するという手続きを、複数候補者に対する直接投票制に変更した憲法第76条の改正と、同年の大統領選挙の影響を考察する。また、新たな抗議運動の拡大、野党間の協同による選挙戦略の展開、候補者擁立が初めて同胞団の名の下で行われたことや大統領職の継承に対する反対運動の高まりといった政治情勢の変化が、2005年の選挙過程に大きく影響したことを明らかにする。

本章では、また、選挙登録、議員定数配分の不均衡、そして選挙区分配分の不均衡などの手続上の重要な問題や欠陥を指摘し、それらが選挙過程にどのように影響しているかを考察する。さらに、ここでは、選挙制度と、選挙過程における暴力や選挙資金の増大との関係を検証する。そして、最後に、同胞団の選挙戦略と政治環境の変化を考察することによって、同胞団が選挙制度の欠陥、法的制約、そしてセキュリティ上の規制を乗り越えるに至った要因を詳細に説明する。